

古代北部九州の掘立柱建物に関する一試論

松尾史子

1. はじめに

最近、集落とも官衙遺跡ともいいがたい遺跡が増加してきており、古代史研究においてその位置づけが問題となってきている。そこで、それらの位置づけを考えるにあたって改めて掘立柱建物の展開過程を検討してみたい。

ここでは筆者の関心の対象であり、これまでほとんど論考のなかった西海道における掘立柱建物の様相を見ていくこととする。また、時期は7世紀から9世紀である。

2. 掘立柱建物の導入

古代北部九州の7c～9cの遺跡をその構成建物から分類すると次のようになる。

1. 竪穴住居のみで構成されるもの
2. 竪穴住居と掘立柱建物が併存するもの
3. 掘立柱建物のみで構成されるもの
 - a. 8世紀前半に出現するもの
 - b. 8世紀中頃以降に出現するもの

1類は古墳時代と同じ形態をとるもので、掘立柱建物のうち倉庫と考えられる総柱建物が存在するものもある。2類は1類から3類に変わっていく途中の段階のもので、両者が混在する。個々の遺跡において掘立柱建物が導入されるのは大半が8世紀中頃か後半であり、地域別に見ても同じ傾向が見られる。1・2類には古墳時代から続くものが多い。3類にはa-8世紀前半に出現するものと、b-8世紀中頃または後半に出現するものがある。付表1は上記のように分類した遺跡を時期ごとに整理したものである。この表から分かるように、西海道全体では8世紀前半には竪穴住居のみで構成される1類が多かったが、8世紀中頃から後半にか

付表1 居住形態変遷表

SH:竪穴住居 SB:掘立柱建物

	SHのみ	SH+SB	SBのみ	計
8C前半	18	6	3	27
8C中頃	13	4	9	26
8C後半	5	6	25	36
9C前半	2		18	20
9C中頃			7	7
9C後半			3	3

けて堅穴住居と掘立柱建物の割合が逆転し、8世紀後半になると掘立柱建物のみで構成される3類がもっとも多くなる。そして、各地域とも9世紀には堅穴住居は姿を消し、掘立柱建物が堅穴住居に取って代わる。ここに8世紀中頃から後半にかけての時期を画期とする堅穴住居から掘立柱建物への変化をみることができる。

ところで、掘立柱建物といえば古墳時代以前から存在するが、それは、宮殿や櫓・倉庫など特殊な建物として存在しているのみである。要するに、古墳時代以前は堅穴住居が一般的な居住形態であり、掘立柱建物は特殊な機能をもつ建物に使用されていたのである。このことと堅穴住居から掘立柱建物への移行を考え合わせると、北部九州では奈良時代に掘立柱建物を居住棟として使用するようになったということができ、このことは居住形態が8世紀を通じて1類から3類へ変化することを意味する。つまり、8世紀中頃から後半にかけて集落に普及する掘立柱建物は、使用目的に「居住性」が加わったという点で前代までのものとは異なるのである。これは、掘立柱建物の展開という大きな流れのなかでの新たな段階として捉えることができるのではないだろうか。

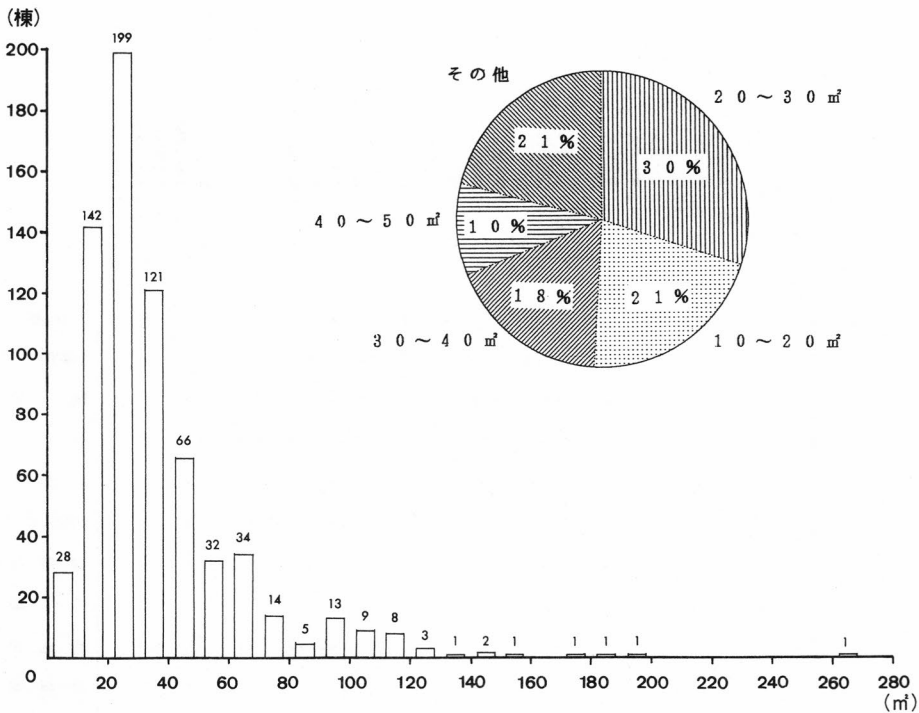
以上のように西海道では8世紀前半から掘立柱建物が導入され、8世紀中頃に一般集落に掘立柱建物が普及していくのであるが、次に、それらが具体的にどのようなものであったのか見ていきたい。

付表2は各遺跡の建物を面積単位別に集積したものである。これをみると分かるように、掘立柱建物を面積からみると20～30㎡のものが最も多く、全体の約30%を占める。次に多いのが10～20㎡のもので21%、次いで30～40㎡のものが18%で70㎡以上の建物が極端に少なくなっている。これらを合わせると10～40㎡までのもので全体の約70%を占め、10～30㎡のものですでに50%を越えてしまう。このことから、掘立柱建物は10～40㎡の規模のものが一般的であったことがわかる。もっとも、10～20㎡のものなかには総柱建物が多く含まれており、一般的な建物および倉庫はだいたい40㎡までの規模で建てられていたといえる。また、逆に、都城や官衙遺跡などでみられる70、80㎡を越えるような建物がいかに特殊なものであるか分かる。

付表3は各遺跡の70㎡以下の建物規模(梁行き、桁行き、床面積)を時期別にまとめたものであるが、40㎡以下の建物をみると2×3間の建物が最も多い。この傾向は導入期から変わらず、2×3間の建物では30㎡を越えるものは少なく、大半がそれよりも小さい。これを前代からの伝統的居住形態である堅穴住居と比較してみると、堅穴住居もだいたい30㎡までの規模であり、このことから掘立柱建物が居住棟として堅穴住居に取って代わるということができる。

また、個々の遺跡において2×3間の建物がどのようなあり方をしているのかみてる

付表2 面積単位別の建物の数と割合



と、遺跡の構成建物の主体となる場合と他の大規模建物に付属する場合の2つのケースがある。^(注1)このように2×3間の建物が掘立柱建物のなかでも一般的な建物であることから、前者のような様相を示す遺跡は一般集落と考えることができ、集落はこれらの組み合わせによって構成されていたと思われる。

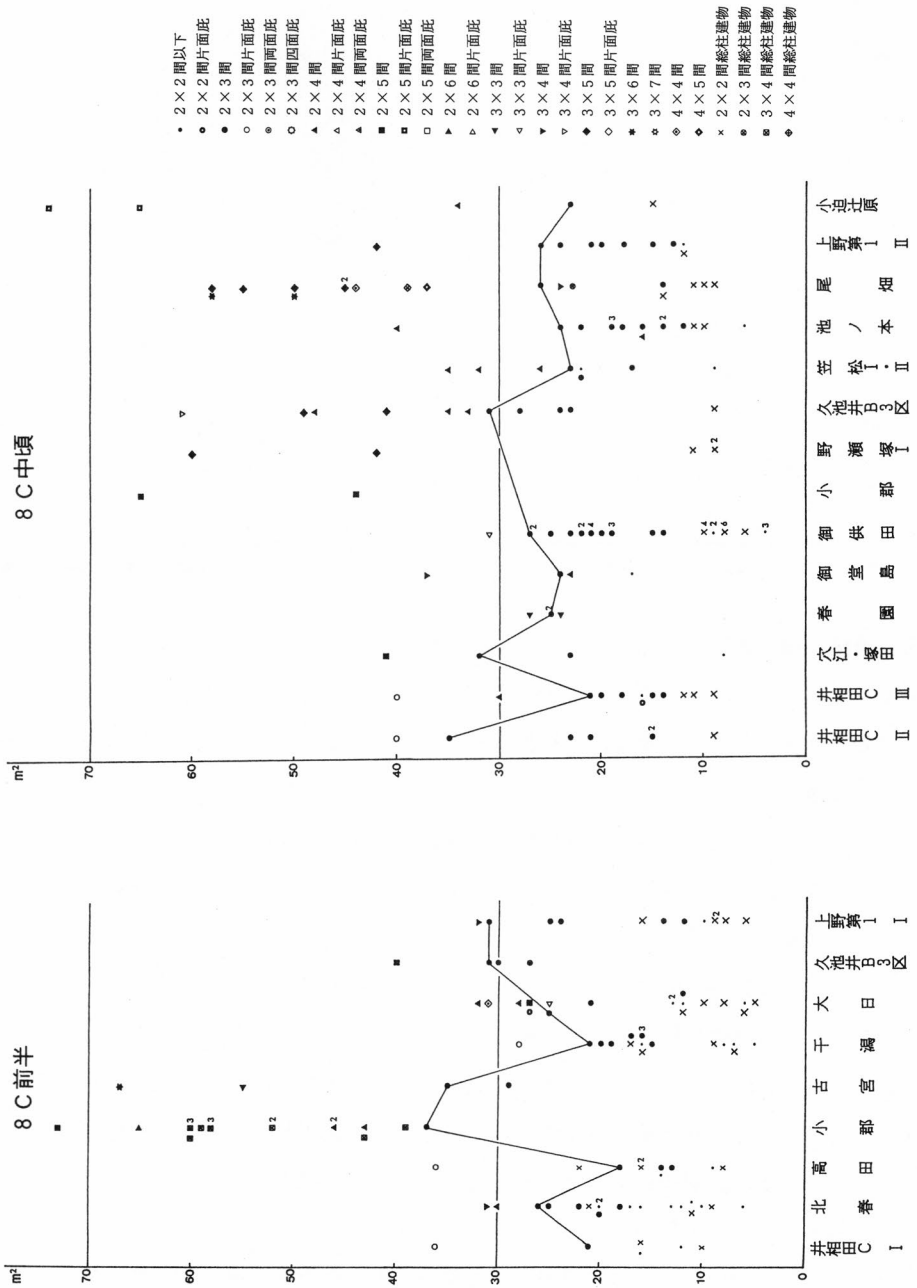
以上のように、西海道では8世紀に掘立柱建物の新たな展開が始まるが、それは「居住性」がその使用目的に加わったという点で前代までのものと異なり、8世紀を通じて一般集落にも普及していく。そして、その中でも一般的なものは2×3間の30m²より小さい建物であり、一般集落ではこれらが主体となっていたと考えられる。

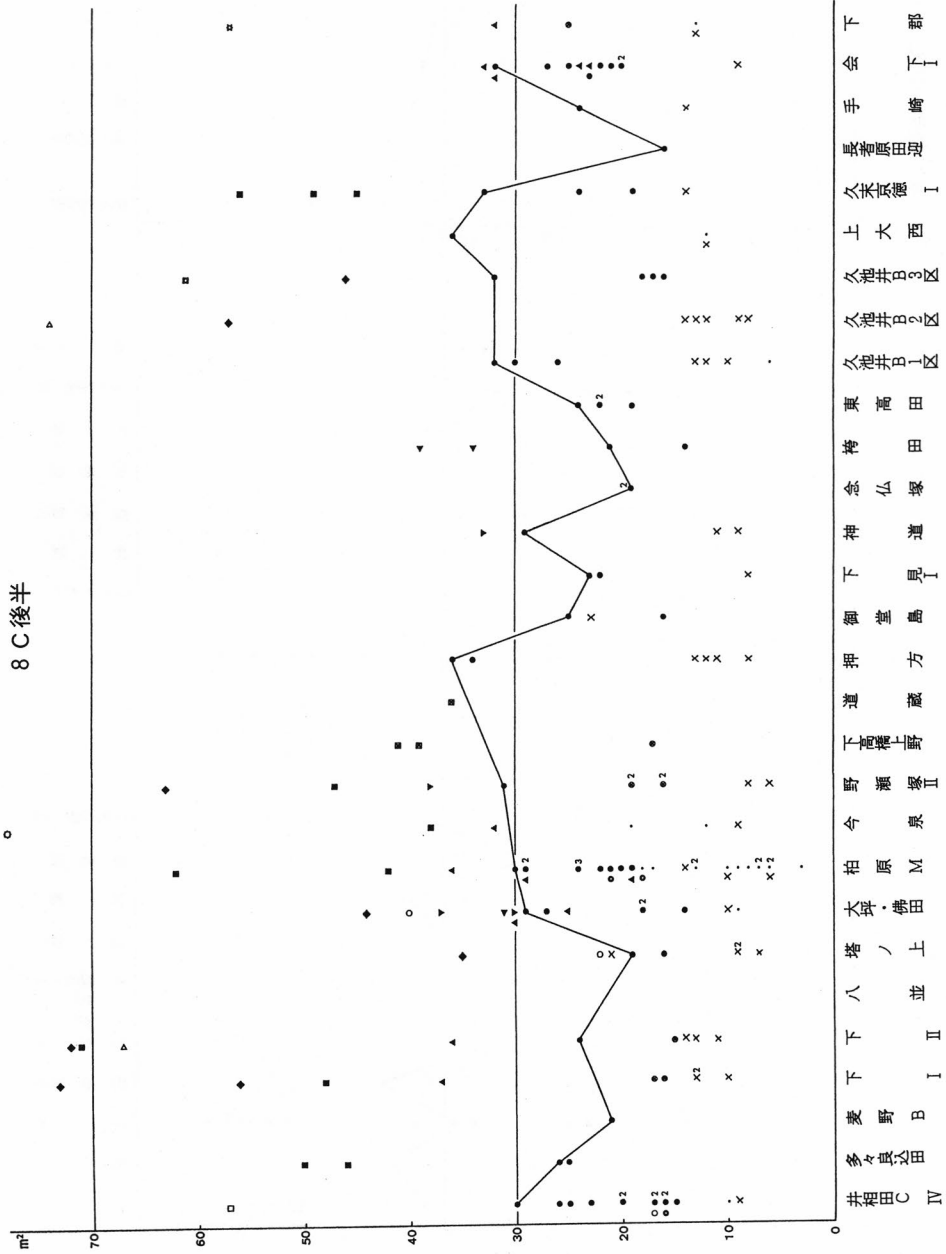
それでは、西海道以外の地域では掘立柱建物はどのように存在しているのだろうか。

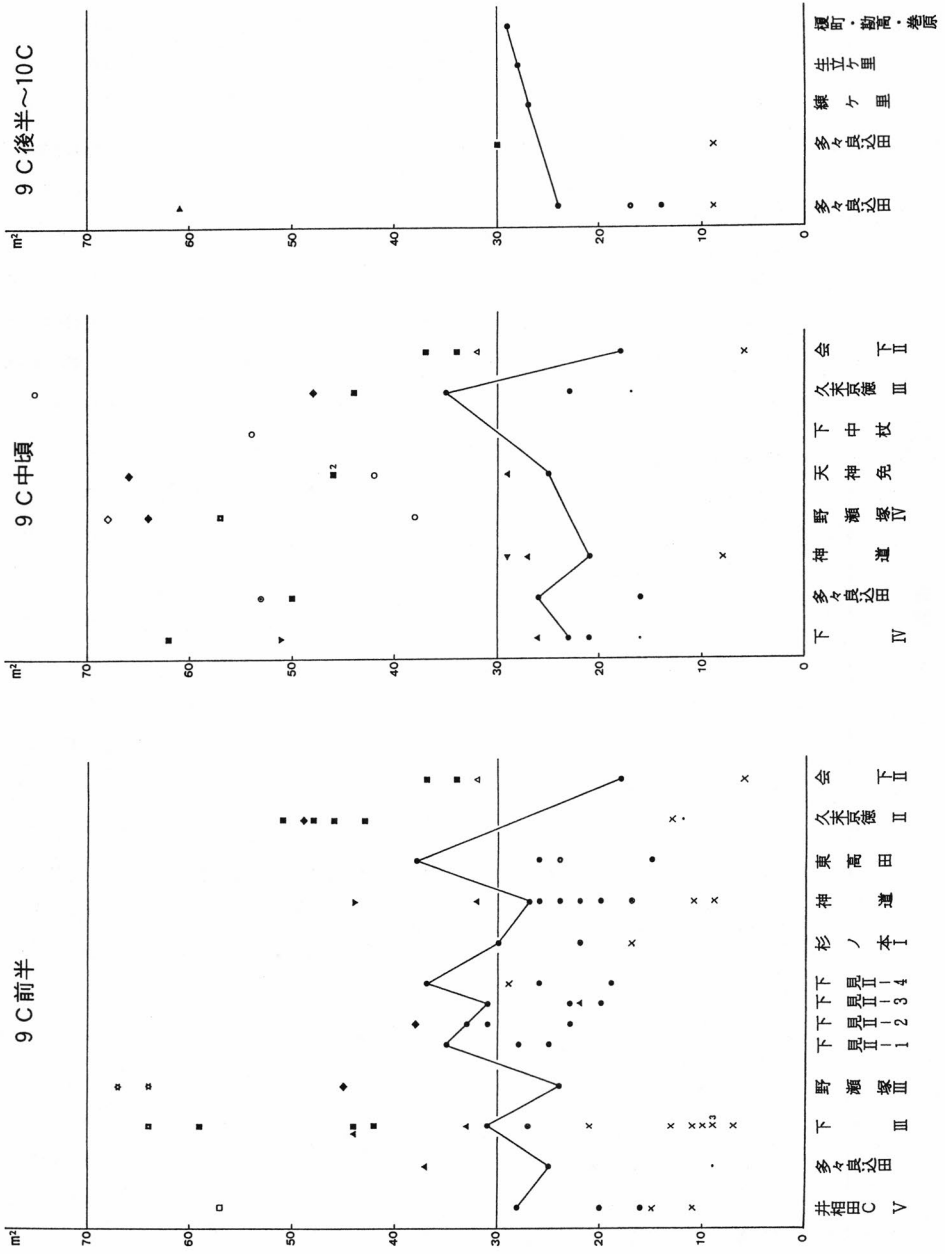
まず、畿内については原口正三氏、小笠原好彦氏、広瀬和雄氏の研究がある。それによると、畿内では5、6世紀からすでに掘立柱建物が導入されはじめ、7世紀には一般集落に普及している。広瀬氏によると、掘立柱建物は2×3間の10~30m²のものが60%を占め、50m²を越えるものは少ない。

一方、東国については、松村恵司氏が千葉県山田水呑遺跡を例にまとめられている。それによると、東国では8世紀以降堅穴住居が急速に縮小化に向かい、平面形態の企画が崩れるのであるが、その背景として掘立柱建物の普及を想定されている。東国では、掘立柱

付表3 建物規模時期別一覽表







建物は8世紀後半に普及しはじめ、堅穴住居と併存しながら次第に数を増やしていく。そして、完全に堅穴住居に取って代わるのは中世をまたねばならないようである。また、建物規模は2×3間のものが50%、2×2間が31%で両者を合わせると全体の80%を占めるという状況である。

このように、西海道・畿内・東国を比較してみると、堅穴住居から掘立柱建物に移行する時期には地域差があり、畿内が最も早く、西海道と東国ではだいたい同じ時期に普及しはじめることが分かる。しかし、建物規模についてはどの地域においても2×3間のものが一般的で、全体の約半分を占めるなどほぼ似たような様相を示している。

3. 掘立柱建物の展開

さて、掘立柱建物は2×3間のものが一般的でその面積は30m²まででほとんど変化がないことを明らかにしてきた。

一方、2×3間よりも規模の大きい建物の様子を見てみると、8世紀前半は30m²代に集中していたのが、8世紀中頃に掘立柱建物が普及しはじめると40m²前後のものが増え、50m²代の建物や70m²を超える庇付きの建物もみられるようになる。さらに8世紀後半には中心建物が50m²をこえる遺跡が出現する。

このように2×3間のものの面積が8世紀から9世紀を通じて変化しないのに対し、これより規模の大きいものには多様性がみられる。そこで、遺跡のなかで一番大きい建物の床面積をメルクマールに遺跡を分類すると次のようになる。

- A. 70m²を超える建物がある
- B. 最大規模の建物が30～70m²である
- C. 最大規模の建物が30m²以下である

これらはさらに細かく分類でき、A類にはa—構成建物のほとんどが70m²を超えるもの、b—a構成建物の主体は70m²以下であるものがある。B類はa—60m²代のもの、b—50m²代のもの、c—40m²代のもの、d—30m²代のものに分けられる。そして、C類に関しては、堅穴住居集落が8世紀後半まで存在することを考慮してあえて分類のなかに入れるなら、C類に入れることができ、これをC b類、それ以外はC a類とする。前述の如く、これがいわゆる一般民衆の居住形態にあてはまるものとする。以上のものを時期別に整理すると付表4のようになる。A a類は他のものとは比べ物にならないくらい大規模で、方位を真北に取り、基準尺を用いた柱筋の通る建物が特殊な建物配置をとるなど非常に企画性が高い。柱掘形は基本的に方形である。ここには国府や郡衙の中心施設が当てはまる。A b類はいずれも大規模で整然とした建物配置をとるが、柱掘形は必ずしも方形ではなく円形

が多い。これが在地性を示すのか時期によるものかは判断しがたい。また、遺跡間には格差があり、久池井B遺跡Ⅱ区と小迫辻原遺跡や今泉遺跡には建物規模や企画性において歴然とした差がある。これらは官衙または郡司層の居館と考えられるものである。B a類・B b類には、長大な建物が主体で倉庫群を伴って縦列していることから官衙と考えられるものと、整然とした建物配置をとるものの全体規模が小さいことなどから在地首長との関わりが考えられるものがある。どちらも遺跡によって差はあるが、2×5間や3×5間など長大な建物から2×3間の様々な建物で構成され、機能によって建物が使い分けられているようである。これ以下のものにはハッキリした企画性を持つものはなく、柱通りも悪い。c・d類は2×3間の建物が主体で、2×4間などの大きい建物が他に突出するかたちで存在する場合が多い。また、d類には8世紀後半まで竪穴住居と共存するものもある。C a類には竪穴住居と混在するものが多い。

次にこれらを時期別に見ていくと、8世紀前半にはB c・d類とC a・b類しかみられなかったのが8世紀中頃にすべての類型がそろってきて、8世紀後半には数的も充実して

付表4 時期別遺跡分類表

		8世紀前半	8世紀中頃	8世紀後半	9世紀前半	9世紀中頃
A類	a	古宮、肥前国府小郡	古宮、肥前国府小郡	小郡、道蔵八並、下高橋上野		
	b		小迫辻原	下①②、野瀬塚② 今泉、小迫辻原 久池井B 2区	野瀬塚③	天神免 久末京徳③
B類	a		野瀬塚① 久池井B 3区	柏原M 久池井B 3区	下③	下④ 野瀬塚④
	b		尾畑	下郡 久末京徳① 多々良込田 井相田C④、原ノ町	坂本 久末京徳② 井相田C	多々良込田 下中杖
	c	久池井B 3区	井相田C②③ 上野第一② 穴江・塚田・池ノ本	大坪・佛田	神道②- 2	
	d	井相田C、上野第一① 高田 北春、大日	御堂島② 御供田 笠松	塔ノ上、神道②- 1 袴田、久池井B 1区 上大西、会下① 押方	下見②- 1、2 杉ノ本 東高田 会下①②	会下② 下見②- 3
C類	a	干潟	春園	東高田 麦野B、御堂島③ 下見①- 2、 長者原田迎、手崎		神道②- 3

くる。9世紀については遺跡の数が希薄であるが、これは発掘例が少ないため今後数が増えると思われる。これは、掘立柱建物の普及に対応した様相であるといえる。また、時期変遷の追える遺跡には時期によって別の類型に分類されるものもある。

それから、官衙遺跡でみられる建物配置などの企画性はB b類まで確認でき、B c類にも企画性を意識していると考えられるものがある。大型の方形掘形はA b類までしかみられない。明確な区画溝や瓦・墨書土器・施釉陶器などの特殊遺物がたくさんみられるのはB b類までである。下見・御堂島・神道遺跡でも出土しているが量的に少なく、国府に近いことからその関係で入手したと考えられる。これらのことにより官衙遺跡と認定される条件の一つでも持つ遺跡はほとんどがB b類より上位のものであることがわかる。いままでも官衙でも一般集落でもない遺跡として捉えられていたのはこの類型に分類されるものであろう。

さて、先にも述べたようにC類が一般民衆の存在形態で、A類には国府や郡衙、その他の官衙、郡司層の居館があてはまってくることから、B類にはその中間にあたる層(以後中間層とする)の存在形態が求められると考えられる。そこで、次にこのB類に焦点をあてて8世紀から9世紀の動向をみてみたい。

さて、付表4をみると、8世紀前半の掘立柱建物は他の集団よりもいち早く導入されるもので、干潟遺跡以外はすべてB d類のものである。ほとんどが堅穴住居と混在するもので、しかも他の建物に突出して規模が大きい。

8世紀中頃はc・d類の40㎡前後のものが多く、あらたにa・b類が出現する。前代のものが規模を拡大している。

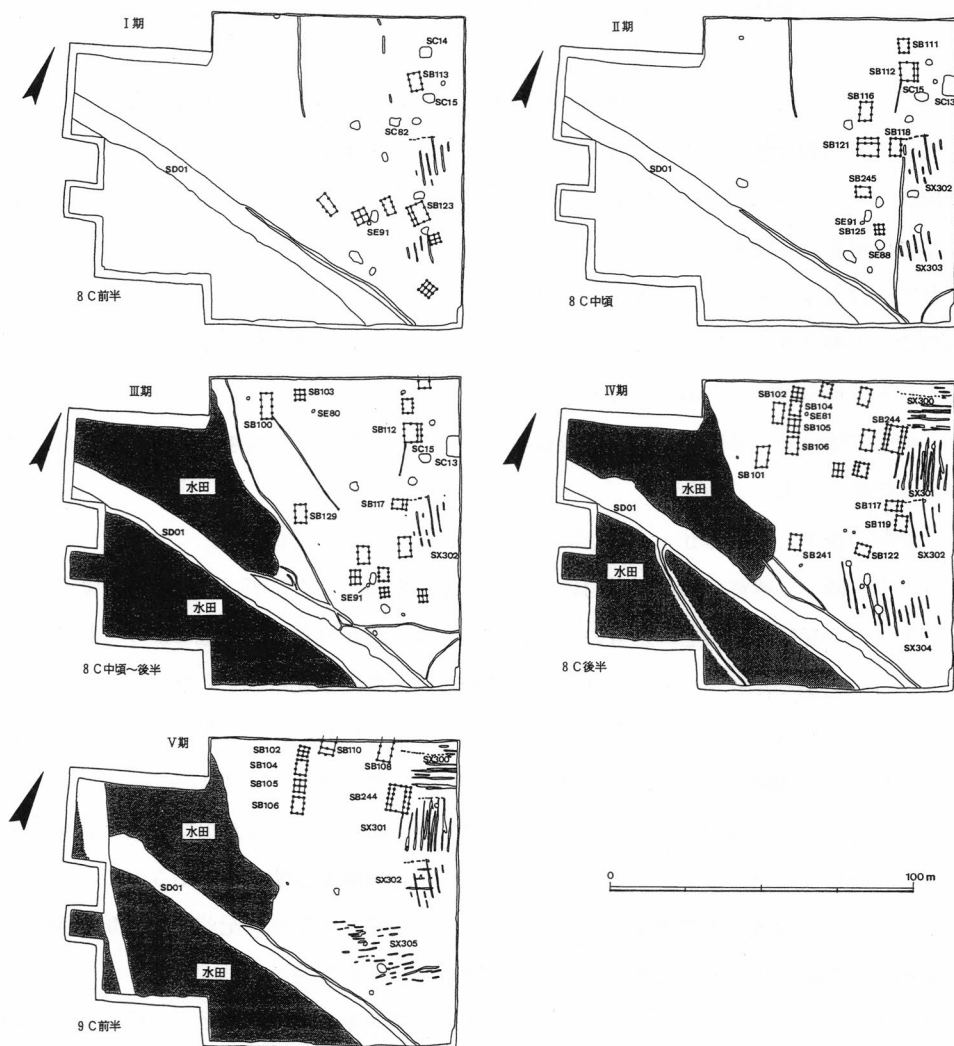
8世紀の後半になるとb・d類が増えてc類が減少するようである。

9世紀以降では遺跡の数が相対的に少なく状況が把握しにくい、下見遺跡のように8世紀後半にC a類に分類されたものでB d類に上昇したものとや神道遺跡のようにB d類からB c類に上がったものもある。B b類までが前代とあまり変わっていないことから類推すると、B c類以下では相対的なランクアップがあり、それは、この段階に堅穴住居が姿を消すことと無関係ではなく、C b類に属すべきものがすべてC a類になることにより、C a類だったものに掘立柱建物のみになるものやB d類になるものが出てきたということになるのではないだろうか。つまり、一般成員の住居の規模も拡大してくるのである。

ここで8世紀の流れを整理すると、掘立柱建物出現期である8世紀前半のd類の30㎡代のものが8世紀中頃にc・d類の40㎡前後に成長し、8世紀後半にはa・b・c・d類すべての遺跡が見られるようになる。8世紀中頃との関係を考えてみると、前段階のものがb・c・d類またはC a類になる場合やC a類だったものがB類に入ってくる場合などい

ろいろな図式が想定できる。つまり、B b類以下では没落するもの浮上するものがあり流動的であったと考えられるのである。9・10世紀の遺跡の発掘例はわずかであるが、検出されている建物は30㎡前後のものである。憶測ではあるが、9世紀を通して底辺がこの辺りに落ちついてくるのではないだろうか。

以上時期ごとにB類の様相をみてきたが、遺跡の存続期間に注目すると短期間のものが多く長期間で変遷の追えるものはわずかである。この中でもっとも動向がよく把握できる例は井相田C遺跡で、出現期にはB d類だったものが終末期にはB b類になる。具体的にみると、I期からⅢ期までは一般集落の様相を呈しており建物間にもあまり差がなかったのが、Ⅲ期からⅣ期にかけて水田が開発され畑も拡大して、柱通りは悪いが建物配置が整



第1図 井相田C遺跡 遺構変遷図

然としたものになる。また、この時期の大溝・井戸からは墨書土器も出土しており^(注2)、政治的な様相も帯びてくる。周辺遺跡が竪穴住居主体であることやⅣ期の中心建物が前代から同じ場所で建て替えられ、その度に規模を拡大していることから、ここには一般農民が生産力の向上に伴って成長していく姿が見られるように思う。このように全体の傾向をみると8世紀中頃に建物規模に多様性が出てくる。これは何を反映しているのだろうか。それは井相田C遺跡の例から類推すると、一般農民の成長、それによって生じる農民の階層分化ではないだろうか。

4. おわりに

西海道では8世紀前半から掘立柱建物が導入され、8世紀中頃から一般集落にも普及していく。その主体は2×3間建物であり、全体の約半分を占める。集落においてはこれが単独または複数で場合によっては総柱建物とセットになって存在する。掘立柱建物が普及する時期を他の地域と比較すると、東国では同じころだが畿内では既に7世紀に普及している。しかし、2×3間建物が主となることはどの地域でも変わりがないようである。また、西海道では9世紀には掘立柱建物が竪穴住居に取って代わるが、東国では中世まで両者が混在している。

一方、これよりも規模(桁行き・梁行き)の大きい建物は、この2×3間建物を付属または従属させる形で存在しており、その床面積には掘立柱建物が普及する8世紀中頃から後半に多様性が出てくる。そこで、遺跡における最大規模の建物をメルクマールにA a類からC b類まで分類し、その結果B類が有力農民層を含む中間層の存在形態にあてはまると考えられることが分かった。また、官衙遺跡の認定条件を考慮するとB b・c類の間に一線引くことができ、B a・b類には官衙遺跡と在地首長や有力農民層の集落が混在することが明らかになった。そのB類には8世紀中頃から後半に多様性がでてくる。そこには流動性が想定でき、それは農民層の階層分化の実態を反映しているのではないかと考えている。今回は、建物面積を主な指標として大雑把に分類したが、B類についてはもっと総合的な分析による分類と性格付けが必要である。それは今後の課題としたい。

(まつお・ふみこ＝京都府教育庁指導部文化財保護課技師)

最後に、本小論は筆者の修士論文の一部をまとめたものであり、在学中に御指導いただいた佐藤宗諄先生、坪之内徹先生、資料の収集に便宜を図っていただいた白木守氏、富永直樹氏、大分県教育委員会の方々に厚く御礼申し上げます。

付表5 遺跡一覧表

(No.:地図番号と同じ、SH:竪穴住居、SB:掘立柱建物、SD:溝、SE:井戸、SK:土壌)

NO.	国名	郡名	遺跡名	時期	居住形態	特殊遺物・その他	
1	国	那珂郡	井相田C遺跡	8C前半～9C前半	SH+SB→SB	墨書土器・人面墨書土器・木簡・木器・製塩土器・瓦	
2			仲島遺跡	8C前半～8C後半		SE	
3			南八幡遺跡	8C中頃～8C後半	SH		
4			麦野A遺跡	7C後半～9C初頭	SH		
5			麦野B遺跡	8C後半	SH→SH+SB		
6		糟屋郡	高田遺跡	6C中頃～8C前半	SH→SH+SB		
7			多々良込田遺跡	8C後半～10C中頃	SB	越州窯青磁・灰釉・緑釉・白磁・瓦・石帯・硯・三彩・製塩土器	
8		早良郡	柏原M遺跡	8C後半～9C前半	SB	墨書土器・硯・青磁・三彩・石帯・製塩土器・瓦	
9		前	志麻郡	広田遺跡	8C代	SH+SB	墨書土器
10			怡土郡	奈良尾遺跡	8C中頃～9C後半	SB	鍛冶遺跡、緑釉・灰釉
11			鞍手郡	下遺跡	8C後半～9C中頃	SB	緑釉・製塩土器
12			嘉穂郡	北春遺跡	8C前半	SB	
13				大坪・佛田遺跡	8C後半～9C初頭	SB	
14				穴江・塚田遺跡	8C前半～8C中頃	SH→SB	墨書土器・製塩土器
15			榎町・勘高・巻原遺跡	10C	SB		
16		夜須郡	中島田遺跡	6C末～8C代	SH		
17			高原遺跡	6C末～8C末	SH	墨書土器・転用硯・製塩土器・鉄滓・鞆羽口	
18			宮原遺跡	6C後半～8C後半	SH→SH+SB		
19			小田道遺跡	8C前半～8C中頃	SH		
20			八並遺跡	8C後半	SB		
21			塔ノ上遺跡	8C中頃～8C末	SH→SB	墨書土器・転用硯・製塩土器	
22	国	御原郡	前伏遺跡	6C末～8C中頃	SH		
23			薬師堂東遺跡	6C末～8C末	SH→SH+SB		
24			大板井遺跡	7C前半～8C前半	SH		
25			向築地遺跡	7C前半～8C前半	SH		
26		筑		小郡遺跡	7C中頃～8C後半	SB	郡衙
27				干潟遺跡	7C中頃～8C中頃	SH→SB	
28				井上薬師堂遺跡	7C後半～8C前半		大溝のみ、木簡
29				井上廃寺	7C後半～		
30		後		春園遺跡	8C前半～8C中頃	SH→SB	
31				下高橋上野遺跡	8C後半～	SB	
32			御井郡	古宮遺跡	7C後半～8C中頃	SB	第一期国府
33				阿弥陀遺跡	8C中頃～10C前半	SB	第二期国府
34				朝妻遺跡	10C前半～11C中頃	SB	第三期国府
35				横道遺跡	11C後半～12C前半	SB	第四期国府
36			風祭遺跡	8C前半～10C初頭	SB	官衙遺跡	
37			御堂島遺跡	7C後半～8C後半	SH→SB	墨書土器・転用硯・ヘラ書土器・丹塗土器・緑釉	

38		下見遺跡	7C後半～9C後半	SH→SB	墨書土器・転用硯・ヘラ書土器・丹塗土器・緑釉・線刻土器
39		神道遺跡	7C後半～9C後半	SH→SB	墨書土器・転用硯・ヘラ書土器・丹塗土器・緑釉・青磁
40		へボノ大遺跡	8C中頃～9C前半	SB	郡衙？
41	筑	三潞郡 汐入遺跡	7C後半～8C後半	SB	転用硯・褐釉
42		夫婦塚遺跡	8C前半or中頃	SB	
43		御供田遺跡	8C前半or中頃	SB	
44		蓮輪遺跡	8C前半～9C初頭	SH+SB	
45		道蔵遺跡	8C後半～9C初頭	SB	郡衙？
46		天神免遺跡	9C	SB	
47		酢正免遺跡	8C前半・9C	SH	
48	後	庄屋野遺跡	8C後半	SB	
49		安武三反野遺跡	8C末～9C前半	SB	
50		押方遺跡	8C後半～9C初頭	SB	
51		野畑遺跡	8C中頃～9C前半	SB	転用硯・墨書土器
52		念仏塚遺跡	8C中頃～10C中頃	SB	鍛冶遺跡、墨書土器・転用硯・青磁
53		野瀬塚遺跡	8C中頃～9C中頃	SB	郡衙工房？墨書土器
54	国	坂本遺跡	8C後半～9C前半	SB	墨書土器
55		今泉遺跡	8C後半～9C前半	SB	豪族居館？墨書土器・青磁・ヘラ書土器
56		杉ノ本遺跡	8C末～9C前半	SB	
57		々	10C代	SB	
58	上妻郡	袴田遺跡	8C代	SH+SB	墨書土器
59	豊	築城郡 山崎遺跡	6C後半～8C初頭	SH	
60		広幡遺跡	6C末～8C末	SH	8C中大鍛冶、9・10C遺物のみ、緑釉
61		池ノ本・出口遺跡	7C後半～8C中頃	SH→SB	製塩土器
62		安武・深田遺跡	7C末～8C前半	SH	墨書土器・製塩土器・木簡
63		赤幡森ヶ坪遺跡	6C後半～9C初頭	SH→SH+SB	墨書土器・ヘラ書土器・製塩土器・石帯・緑釉・灰釉・鉄滓・鞆羽口・銅碗
64	前	宇佐郡 中原遺跡	6C後半～9C後半	SH→SB	
65		尾畑遺跡	8C中頃	SB	和同開珎
66		笠松遺跡	8C中頃	SB	
67		向野遺跡	8C～9C	SB	
68		大根川遺跡	8C～9C	SB	
69	国	上毛郡 上大西遺跡	8C後半	SB	
70		仲津郡 皆見遺跡	6C後半～8C後半	SH→SB	硯・製塩土器
71	豊	々	10C代	SB	
72	後	大分郡 新光遺跡	8C中頃？	SB	
73	国	地蔵原遺跡	8C後半～9C後半	SB	郡衙？硯・瓦
74		下郡遺跡	8C後半～	SB	墨書土器・緑釉・硯

75		久土遺跡	8C～9C	SB	
76	豊 後 国	日田郡 上野第一遺跡	8C前半～8C中頃	SH+SB	刻書土器・製塩土器・転用硯
77		堂園遺跡	8C前半	SH	
78		手崎遺跡	8C中頃～8C末	SH→SH+SB	製塩土器
79		小迫辻原遺跡	8C中頃～8C後半	SB	豪族居館？墨書土器
80		長者原田迎遺跡	8C中頃～8C後半	SH→SH+SB	
81		慈眼山以西	8C後半		SEのみ、墨書土器
82		陣ヶ原辻原遺跡	8C代	SH	
83		誠和神社裏遺跡	8C代	SB	
84		速見郡 会下遺跡	8C後半～9C中頃	SB	石帯・羽口・赤色塗彩土器
85		国崎郡 久末京徳遺跡	8C後半～9C後半	SB	豪族居館？緑釉・製塩土器
86	肥 前 国	養父郡 本川原遺跡	6C後半～8C前半	SH	
87		日岸田遺跡	7C後半～9C初頭	SH→SH+SB	
88		安永田遺跡	8C代	SH	鍛冶遺跡
89		萩野遺跡	古墳末～奈良	SH	
90		宝満谷遺跡	7C中頃～7C後半	SH	
91		々	8C代		SKのみ
92		中津隅干飯遺跡	10C初頭or中頃		SK, SE、石帯
93		佐賀郡 備前国府跡	8C前半～9C後半	SB	
94		久池井B遺跡	8C前半～8C後半	SB	
95		東山田一本杉遺跡	奈良・平安	SB	墨書土器・緑釉・青磁
96		西山田遺跡	奈良・平安	SH→SB	石帯・墨書土器・ヘラ書土器
97		大久保三本松遺跡	奈良・平安		
98		大日遺跡	8C前半	SB	
99		東高田遺跡	6C前半～9C初頭	SH→SB	
100		原ノ町遺跡	6C～8C後半	SH→SB	
101		古村遺跡	6C末～9C前半	SH→SB	緑釉
102		御手水遺跡	6C末～9C初頭	SH→SB	
103		南宿遺跡	9C？	SB	
104	琵琶原遺跡	7C～8C		SK, SD、「稲主」ヘラ書、「稲主」・「五月」墨書土器	
105	大野原遺跡	8C		SD、官道	
106	徳永遺跡	平安	SB		
107	泉三本栗遺跡	平安前半			
108	上和泉遺跡	々		土墳墓	
109	村徳永遺跡	々		SK, SD, SE	
110	弁田寄遺跡	奈良		SK, SE、墨書土器	
111	千布二本黒木遺跡	平安		SE	
112	樺木遺跡	10C前半		SK	
113	北原宝満遺跡	9C中頃～10C初頭		SD, SE、鉄滓・羽口・埴塼	
114	松浦郡 千々賀小園遺跡	7C後半～9C初頭	SB	墨書土器	

115		伊岐佐伊良尾遺跡	7C末～8C後半		SK
116		〃	10C中頃～後半	SB	鍛冶遺跡
117		寺の尾遺跡	奈良・平安		包含層より緑釉・墨書土器
118	肥	小城郡 今出川B遺跡	8C～9C		SKより羽口
119		織島西分遺跡	6C後半～8C前半		SKより人面ヘラ書土器
120		〃	10C後半		緑釉
121		練ヶ里遺跡	9C～10C	SB	
122	前	生立ヶ里遺跡	9C～10C初頭	SB	墨書土器・青磁
123		寺浦廃寺	7C末～		
124		杵島郡 玉江遺跡	8C代	SB	
125		藤津郡 大黒町遺跡	8C後半	SB	墨書土器・帯金具・木製品(扇・蓆編み具等)
126	国	神崎郡 下中杖遺跡	8C～9C後半	SH→SB	緑釉・青磁・白磁
127		下石動遺跡	8C前半～	SH→SH+SB	
128		吉野ヶ里遺跡群	奈良・平安	SB	駅家?墨書土器・ヘラ書土器・青磁・硯・木簡

注1 さらに前者では、2×3間の建物は単独で存在する場合といくつかまとめて存在する場合、倉庫とセットで存在する場合がある。

注2 「酒杯」「中南」「□麻呂」「遠賀」「□徳」のほか「田」「井」「×」「西」「品」「衙」「真」「大」「奈カ」「廣カ」「吉カ」など単字句や記号が多い。

参考文献

- 山中敏史『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房、1994
- 原口正三「古代・中世の集落」(『考古学研究』23-4、1977)
- 小笠原好彦「畿内および周辺地域における掘立柱建物集落の展開」(『考古学研究』25-3、1979)
- 広瀬和雄「畿内の古代集落」(『国立歴史民俗博物館研究報告』22、1989)
- 「考古学からみた古代の集落」(『日本通史』3、岩波書店、1994)
- 松村良一「西海道の官衙と集落」(『新版古代の日本』3、角川書店、1991)
- 氏は筑後地方を例にして律令体制下の集落を概観されている。
- 九州古文化研究会『古文化談叢』26-特集 古代官衙一、1991
- 松村恵司「村のくらし」(『古代史復原』9、講談社、1989)
- 松村恵司ほか『山田水呑遺跡』日本道路公団・山田遺跡調査会、1977
- 古代を考える会「東国集落遺跡の検討」(『古代を考える』20、1979)
- 鬼頭清明「古代の村」(『古代日本を発掘する』6、岩波書店、1985)
- *各遺跡についてはそれぞれの概報・報告書によるが、ここでの記載は割愛する。

